

# 桑野塾

桑野塾 検索

<http://deracine.fool.jp/kuwanojuku/>

大学などの研究者に限らず、興味を持って研究していることを自由に発表しあう「広場」です。  
どなたでもご参加いただけます。  
それぞれの興味が少しずつ重なり合うことで、新たな知見を見いだそうという場です。

## 第20回

2013年  
11月16日(土)  
15:00 ~ 18:00

早稲田大学 早稲田キャンパス16号館 820号室

★ どなたでもご参加いただけます。会場に直接お越しください。参加無料。

☆ 終了後、近くの居酒屋で懇親会を開催します。(飲食費は別途)

※予約の都合上、懇親会参加をご希望の方はなるべく事前にご連絡いただくと助かります。

※報告者・タイトルは変更の可能性もあります。ご了承ください。



## 大正二年のバレエ・リュス——『春の祭典』初演100年を記念して

報告者: 沼辺 信一

### 1913年パリ、百年前の日本人はニジンスキーをどう捉えたか?

昨秋の「日本人の眼に映ったバレエ・リュス」の続編。今回は1912(明治45/大正元)年における日本人のバレエとの最初の遭遇を紹介しましたが、今回はいよいよ翌1913(大正二)年、バレエ・リュスのパリ公演を取り上げます。

この年、ディアギレフはニジンスキーの革新的な振付を得て、『遊戯』(ドビュッシー曲)と『春の祭典』(ストラヴィンスキー曲)の二作を世に問い、大胆な音楽=身体表現によってスキャンダルを巻き起こします。バレエ史上に名高い同年のパリ公演に足を運んだ二人の日本人——小山内薫と島崎藤村は、バレエ・リュスの舞台にどう反応し、何を体得したのか。それが今回のテーマです。併せて、大正二年の東京で、若き画家たちが遠く憧れて制作したニジンスキー素描・版画についても考察します。



『春の祭典』(1913年初演)より  
「乙女たちの踊り」



島崎藤村の手製アルバムより  
バレエ・リュス関連の切り抜き(馬籠、藤村記念館蔵)



長谷川潔『踊り』(木版、1913年末)  
雑誌『仮面』表紙